

内地・その他

嗚呼 大正生れ 青春激動の時代

宮城県 清和田 忠 雄

我々大正生まれの青年時代は激動の時代で愚かな戦争の明け暮れでした。国民の三大義務と称して教育・納税・兵役と、満二十歳ともなれば好むと好まざるにかかわらず適齢の徴兵検査を受けなければなりません。そして甲種合格ともなれば人の嫌がる軍隊に入隊して厳しい訓練をも受けなければなりませんでした。

当時はこの検査と称して十二月一日より翌三月

三十一日まで生まれた者は一学年下の者と共に徴兵検査を受ける仕組みでした。小生は大正九（一九二〇）年一月三日生まれで、御多分に洩れず一学年下の者と一緒に検査で、同級生よりは一年遅れの入隊で、昭和十五（一九四〇年）年〔紀元二千六百年〕度の徴集兵でした。

六月、佐沼小学校の講堂に於いて一泊二日間の予定で適齢検査を受け、早生まれなので順番一位で甲種合格の声を聞かされました。

九月三日に仙台連隊区司令官名の「朝鮮羅南第八部隊十二月二日広島市に於いて現役兵に徴集し入営を命ずる」との証書を受け取りました。身の廻りの整理やら親戚の方々への挨拶廻り等で、戦時下の風雲急を告げる時節柄だけに身の引きしま

る思いで、覚悟はできておりました。青年訓練所より青年学校と名称も変わり、週一、二回位の召集日で軍事訓練が主でした。夜は二時間の夜学で、これまた軍事に關しての学科および算盤の練習でした。日中は農作業で骨身いっばいの重労働なので夜は疲れて居眠りしながらの勉強でした。中には軒をかく者もいる始末で、いやはやとんだ夜学風景でした。

当時は現代のような機械化の時代と違い全部が全部手作業という重労働でしたので、どの家でも秋の穫り入れも雪が散らつく頃までかかったものです。年老いた両親と幼い兄弟を残しての入隊するのが長男として心残りで一番に辛かったです。た。

これも君のため、国のためと「一旦緩急あれば義勇奉公に殉じ」るのが「男子の本懐之に過ぎるものなし」と叩き込まれている時代なので、皆が皆そう考えているので、どうしようもなく、自分だけとは言えないのです。

そうこうする内に入隊の日も近づき、昭和十五年十一月二十八日、郷里を出発すべき日となりました。当時はまだ防諜上も厳しくないもので、庭には仰々しく「祝入營」の数本の幟を立て「千人針」の胴巻と、肩から祝入營のこれまた名入りの襷を掛け、得意顔に小学校上級学年の生徒・国防婦人会・愛国婦人会・在郷軍人分会・青年団男女団員・青年学校生徒、村役場職員・親戚の方々と大勢の見送りを受けました。

桜岡公園では盛大なる歡送会を挙行され、五人の入營兵を代表して挨拶をさせられ「行って参ります」と勇躍征途につきました。仙北鉄道のコトコトと鈍行の軽便汽車で登米駅より乗車、仙台駅まで親戚の叔父に付き添われて参りました。ここで各地より集合した一団と合流して一路広島市へと向かったのですが、途中静岡駅で友人の親戚の面会を受け、東北人では当時は初めて見た枝葉付のみかんを戴きました。しかし広島まで食べず大事に持って行き、軍服と着替えて郷里に私物を送

る荷物の中に入れて送りました。

郷里の父母兄弟が初めて見る枝葉付きみかんに喜ぶ顔が目に見え、ホロリとした事が今だに思い出されます。また日本一の富士山を窓越しに拝めたのも、これまた生まれて初めて見る出来事でもありました。

広島で二週間の滞在中軍服の着用、帽子の被り方、巻脚絆の巻き方、敬礼の仕方、徒歩訓練等々初年兵としての初歩的な一通りの訓練を受け、どうにか型通りの恰好ができた頃、厳島（日本三景の一つ）神社を参拝させられました。海の中に浮かぶ赤い大鳥居、回廊と驚愕するものばかりで、特に鹿を見て戯れるのも初めてで、何もかも田舎者には珍しかったのです。

十二月九日、宇品港より軍用貨物船の二段仕切りで、蚕棚のような座っているのがやつとのギウギウウ詰めにさせられての船出でした。途中から名にしおうかの玄界灘を通過の時は、あれ程の

大きな輸送船が木の葉のごとく上下に翻弄され、胸がこみ上げ、顔面蒼白、冷や汗をかきながらの悪戦苦闘で、ゲットゲットとヘドを吐く始末でした。飯などはとうてい喉を通らず、いやはや陸の兵どもも初めての経験で閉口しました。えらい船酔いでした。

十二月十三日、ようやくにして朝鮮咸鏡北道清津府羅南（現北朝鮮）第十九師団山砲兵第二十五連隊第三大隊第七中隊猪狩隊に入隊する。酷寒零下の三〇度という北朝鮮の広野、我々東北の人は生まれ初めての経験で、想像もつかない寒さです。窓という窓は全部二重窓で、暖房はペーチカといって巨大な円筒型の煉瓦の積み重ねでできており、石炭を燃料として部屋の中はまるで春の季節のようでした。

入隊二日位までお客様扱いでしたが、宮城・福島・新潟県人という所帯でしたので、お互いにライバル意識が強く、対立が激しく、気合がかかっておりました。入浴場より中隊の兵舎まで帰る間

に、手にしたタオルが凍って棒のようになる始末です。また便所の大便もピラミットのように重なり、尻につかえるので清掃屋のヨボ（人夫）が鉄の棒で砕いて牛車で運んで行くのです。水道の蛇口など、鉄の部分に素手で触るものなら吸いついて指の皮が剥がされる始末です。

正月の四方拝には前夜の非常呼集で叩き起こされ、羅南神社まで駆け足の行軍で参拝、連隊に帰って誠山神社参拝、宮城の方角に向かって遙拝して終了。元旦は鯛のお頭付とお神酒が振る舞われて一日中無礼講でお休みとなります。

山砲隊の軍旗祭には歩兵と違って軍旗では無く九四式の連隊砲が主幹と聞かされておりました。六カ月の基本訓練で一期の検閲も終了し、昭和十六年六月一日、隊付衛生兵としての試験に合格、羅南陸軍病院に原隊より六カ月間通修での教育を受け一人前の衛生兵として勤務する。三カ月交代での龍岡射撃演習場廠舎に駐屯しての演習、朱乙温泉までの強行軍、秋季の大演習ともなれば會

寧・満州国・圖門・安寧・牡丹江・勃利・佳木斯間で、途中若干の汽車輸送もあるが往復徒歩行軍の大行軍でした。

ハイエナのソ連を想定しての大演習です。ハイエナとは犬に似ているが鼻づらが短く後半分は小さく前足の指は四本、草原に住み夜中に出て来て猛獣達の食い残した肉や骨を食い、口辺はいつも血腫くドス黒い血痕で汚れていました。ブチハイエナは体が大きく性質が荒く、夜になると人の笑い声に似た声を出すのでワライハイエナとも言う。狡る賢い性質でソ連の国民性がよく似ているのです。

明治三十七（一九〇四）年二月勃発した日露戦争は完勝に終わり、三国干渉により返還させられた遼東半島をロシアは三年後に奪い取り、満州支配と朝鮮半島に干渉を加え日本を狙うなどの事情を知るに及び狡猾な国とのイメージチェンジして来たものです。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋^{ロコウキョウ}にて日中両軍の衝突、昭和十三年七月の張鼓峯事件、これはソ満国境におけるかなりの大掛かりな紛争となりました。八月十日停戦となりましたが、続いて昭和十四年一月五日にノモンハン事件が勃発、九月に停戦協定が成立しましたが日本は推定で約五万二千人、ソ連は張鼓峯^{チョウコウ}で機械化部隊の小手調べにより肉を食い込み、ノモンハンで骨を噛み砕き、日本軍はここで初めて機械化された近代戦の洗礼を受けたのであります。

昭和十六年四月、蚊帳の外では全く不可解な日ソ中立不可侵条約が調印（外務大臣松岡洋右氏）され、完全に日本は嘲笑され、昭和十六年七月関東軍特別大演習（関特演）の名目で発動された大掛かりな対ソ作戦は、兵力百二十万人、馬匹三十万頭という大動員の召集がありました。

関東軍・北鮮部隊で寒さに耐える部隊将兵でしたが、その後の南方派遣軍司令官山下奉文大將が暖かい南部仏印進駐に利用したのですからたまり

ません。風土病で倒れる兵隊が続出し、それに加えて、さらに南方作戦の進展による島嶼作戦には輸送船に頼らざるを得なくなりました。そして敗戦の色濃厚となり、制空・制海権は敵の手中に陥り、敵機の餌食き潜水艦の魚雷攻撃の的となり、目的地に到達できずして海の藻屑と消え失せ、多くの将兵が犠牲になったのです。

昭和十七年十二月、師管外転出馬輸送のため隊付衛生兵として漢口作戦用軍馬輸送の任務に付きました。満州、北支、南支、新浦線經由で終点浦口駅着、浦口港より輸送船にて軍馬を積み込みました。任務終了後は原隊復帰して十二月二十五日、三カ年の満期を終え、軍隊最後の除隊兵として（後続の兵隊は皆南方戦線へと狩りだされる）内線經由で釜山港に至り、下関港に上陸、同日付で晴れて満期除隊の身となり郷里に帰りました。

除隊後は在郷軍人分会に入会、家業の農業に専念、妻帯しましたが、新婚生活も今だ覚めやらぬ

昭和十九年六月十八日、予備役臨時召集令状により隊付衛生兵として第一総軍東北軍管区第七十二師団歩兵第三百三十四連隊仙台東部第二十二部隊連隊砲中隊佐竹隊に応召する。敗色も濃くなり防諜上征途に就くものには厳しくなり、奉公袋は風呂敷に変わり、旗も幟も自肅させられ、コソコソと一人での入隊でした。

徴兵制度時代の軍隊生活中に九死に一生を得た経験が五回ほどあり、生還に結びついたこれらの事件を振り返って見れば、背筋に冷水を浴びさせられた思いでゾツとします。

一度目は北辺の鎮めとして精強を誇った虎兵団「アリラン」羅南部隊ではあったが満期が延期となり、そのまま予備役に編入され南洋諸島トラック島に三個大隊が派遣された時、貨物船を改造した輸送船に乗船した。恐らく台湾沖で敵の潜水艦の魚雷攻撃を受け轟沈させられたかも知れない。

二度目は昭和二十年八月九日の召集令状により

補充隊に編入されておればソ連軍の侵攻に遭遇し、八月十五日の停戦をデマと信じ、戦闘を続行し羅津と清津の地点でソ連軍戦車部隊が攻撃して来たのを死守する戦闘に参加しておったことでしよう。そして方が一つに戦死を免れた場合には捕虜の身となり、連行され、抑留生活中、酷寒零下三〇度の異国で強制労働に耐え兼ね、凍土のシベリアに命を落したかも知れない。

八月十六日の熾烈なる空襲で羅南師団の軍事施設は壊滅し、街中から望見するに誠山の一本一草に到るまで奇麗に焼き払われて軍都の面影はなく、ただ馬撃場のコンクリートの杭だけが恰も部隊の末路を弔う墓標のごとく焼け野原に整然と立ち並んでいる光景には涙も出なかった。

七年間も戦場を知らない羅南の庶民も阿鼻叫喚の坩堝と化し、師団司令部、陸軍病院等は山中深く移動退避したが、その惨状は見聞することはできなかつた。

三度目は三月から始まった沖繩戦では、六月下旬の召集があれば直接沖繩部隊編成に参加、部落の同年兵と共々参戦し、太平洋最後の地上戦闘で闘い、玉碎させられたことでしょう。

四度目は七月九日の深宵より十日未明にかけての軍都仙台がB29重爆撃機百二十三機編隊による焼夷弾の波状攻撃により被爆、負傷あるいは戦死したかも知れないこと。仙台第一陸軍病院宮城野原分院教育隊勤務のためこの難を逃れたのであります。

五度目は昭和十九年三月十六日、北方要員で陸軍輸送船「日蓮丸」に乗船しておれば、敵潜水艦「タウトグ号」の雷撃で轟沈させられたであつたらうこと。昭和十八年五月二十九日には、アツツ島日本軍守備部隊山崎保代部隊長以下二千五百人の将兵全員玉碎する。

太平洋戦争と敗色の濃くなつた昭和十九年三月十六日、宮城・福島・新潟三県出身者を第二師団歩兵第四連隊に召集、急遽編成された陸軍第四十

二師団歩兵第三百十連隊第九中隊と輜重兵第四十二連隊が釧路港を出航したのが三月十六日午後の四時頃である。船団は陸軍輸送船「山菊丸」「慶安丸」「日蓮丸」「梅川丸」の二列縦隊に護衛駆逐艦「霞」「薄雲」「白雲」が警戒に当たる体型を組んでの出航だった。

港を出て一二〇〇メートル間隔で体型を整え、時速七ノット半という遅い船足で太平洋を南下し、このあと進路を北東に取って中部千島を目標した。しかし米潜水艦「タウトグ号」の魚雷攻撃を受け、流水浮かぶ酷寒の海に投げ出された。将兵は凍傷で手足は蒼白となり、感覚がなくなり、五分とも耐えられない。全身衰弱、朦朧として抱き抱えられ救助された四十六人（三千余人の遭難者の内）の中には千島列島守備隊要員として再度の応召の身となつた羅南部隊を満期除隊した同年衛生兵の野口允郎・池田甚一・戸田春光・横田善栄・木島義正の五人の戦友の姿は遂に無かつたのです。謹んで哀悼の意を表し御冥福をお祈り、合

掌あるのみです。

米潜水艦「タウトグ号」は魚雷を前部に七発、計十四発搭載して我が船団の来るのをキャッチし、待ち構えていたのである。船団は敵潜水艦の雷撃を警戒して「之の字」運動に入り、決められた信号で右に何度、左に何分進める航法であった。夜間は特に「之の字」運動で輸送船団は駆逐艦「霞」の先導の発光信号だけを頼りに針路を右または左にと切りながら変針して進んだのだ。釧路港を出航したのが午後四時頃、そして敵潜水艦のレーダー網に補足されたのは午後六時四十分、魚雷発射は午後八時二十一分、阿鼻叫喚が嘘のように静寂に戻ったのが午後九時頃で、かくして「日蓮丸」、駆逐艦「白雲」の雄姿は流水浮かぶ酷暑の海へ消えたのでした。

このように太平洋戦争末期ころ東北の兵隊等を乗せた輸送船が米潜水艦の攻撃を受け北海道釧路沖で沈んだ。遺族には北方方面作戦輸送中に戦死

との公報と一握りの砂が入った遺骨が届いた。三千人近い人間が死んだ「日蓮丸」「白雲」遭難事件は、戦時機密として事実が秘匿され、戦死の経緯を知らないご遺族がいまだに東北各地に多数おられるとの事です。

平成十（一九九八）年高齢化に伴い一部遺族によつて十年前から続けられて来た合同慰霊祭は、六月を最後に打ち切られるのですが、ご遺族の心は事件の記憶が風化する事なく鮮明に刻まれていることでしょう。

カーキ色の軍服を着た兵隊が寺の門を嚴重に固めていた。左の腕には腕章の白地に赤い文字で「憲兵」と書かれていた昭和十九年三月十八日の夜、北海道厚岸町の正行寺に一台の消防車が現われた。降りて来たのは「日蓮丸」と共にあの流水浮かぶ北海に投げ出されて死線を彷徨った将兵四十数人で、凍傷で手足は蒼白、抱き抱えながら寺の庫裡に運ばれた。

戦後五十年以上経った今、約三千人以上という東北の兵隊が沈んだ岬の沈没地を望む厚岸町愛冠岬の「日蓮丸 白雲遭難平和記念碑」には、こう碑文が刻まれている。

岬を訪れる人よ

わが故郷に告げよ

われらは眠る

この海の彼方に

祖国の平和と

残せし人を想いつつ

われらは眠る

永久にと

徴兵制度による我らが歩んだ足跡を振り返り見れば、羅南山砲兵第二十五連隊創立は大正五年四月一日、野砲兵第二十五連隊と呼称す。大正九年六月一日、早朝の非常呼集により羅北川河川敷より拳大の丸石を持ち運び、「誠」の一字を黒書きして石垣の基礎を作り、その上に祠を建立、誠山神社と呼称して連隊の守護神と崇める。

大正十一年六月十五日、軍備整理要項により連隊は三個大隊に増員（一個大隊は三個中隊）し山砲兵第二十五連隊と改称する。大正十四年八月二十四日、不動ヶ池西側に「馬魂社」が完成、第一回馬魂祭を施行する。以来四月七日を祭典日と定む。昭和十五年羅南第八部隊と改称する。昭和十六年六月、羅南虎八五一〇部隊と改称し、同七月三日、関東軍特別大演習の名目で大掛かりな対ソ作戦として満州部隊及び北鮮部隊に大動員令が下令された。

これには兵力百二十万人、馬匹三十万頭の召集が行われ、二段兵舎、厩舎の急造が行われた。同年十二月八日、海軍機動部隊によりハワイ真珠湾奇襲攻撃で午前零時を期し日米開戦となった。「トトトト・全機突入せよ」「トラトラトラ・我れ奇襲に成功せり」の暗号通信でハワイ真珠湾の第一波攻撃は成功したのですが、奇襲攻撃は帝国海軍のお家芸ではあるが奇襲とは勝利か破局かのいづれかである。

昭和二十年八月十五日、ポツダム宣言受諾、無条件降伏する。九月二日、ミズリー艦上で降伏文書に調印する。十一月三十日陸軍省・海軍省廃止。かくして明治四年二月、鎮台設置兵部省六月一日徴兵令が発布され国民皆兵主義による徴兵制度、建軍以来実に八十有余年の歴史を維持しもつて富国強兵制度の名のもとに世界に冠たる誇りある大日本帝国軍隊も遂に物量の前に屈服した。無条件降伏、武装解除そして軍隊は解隊消滅したのである。

昭和十九年六月十八日、再度の召集で第七十二師団歩兵第三百三十四連隊防諜部隊名傳第三三七三部隊連隊砲中隊佐竹隊に隊付衛生兵として入隊勤務しましたが、その後仙台第一陸軍病院宮城野原分院教育隊勤務となり、昭和二十年七月九日の深夜より十日未明にかけ延べ百数十機に及ぶB29重爆撃機編隊による大爆撃を受け、軍都仙台は市内の四〇パーセントを被災、瓦礫の山となりました。

仙台陸軍病院は勿論、他の公私立病院も全焼し、人々は阿鼻叫喚と逃げ惑う中、宮城野原分院だけは辛うじて戦災を免れました。軍人は元より官民人をも収容して被爆者の治療に専念しましたが、当時は内地でも医薬品は既に底を尽き、満足なる治療もできず仮包帯のみで温泉地に汽車輸送するのが精いっぱいの治療でした。一週間も昼夜の別なく介護に没頭したことも過ぎし往時の思い出として脳裏に刻まれております。

焼野原と化した街は一カ月以上も硝煙の臭いが消えなかつたのです。戦争も次第に苛烈となり敗色も濃くなり、後輩の兵隊も皆南方戦線へと狩り出され、制空制海権は敵の手中に押さえられ、敵機の餌食、潜水艦の魚雷攻撃の的となり、目的地に到達できずに海の藻屑と消え失せました。犠牲者を出し援軍を待つ島の兵隊は食糧も弾丸もなく餓死攻めに合い全軍玉砕を余儀なくさせられました。

大動員令による一億総参加も、戦線では肝心の

兵器や弾丸もなく、ただ神風に頼り、竹槍と日本魂ではどうにもならず。それでも不平不満は許さず、非戦闘員と言えども我々衛生部員も本土決戦となれば戦わねばならず、五人に一挺の歩兵銃ではどうにもなりません。下士官以上は拳銃の携行と軍刀の佩刀が許され、長刀を吊ることとなりましたが、平時の場合では衛生部員は営外居住でも短剣ですが、武器不足となり私物刀まで吊るすようにさせられたのです。

赤紙一枚でいや応なく君の為め国の為という大義名分の下に召集され、飢えと渴きに苦しみ、二十代の青春を棒に振った幾多の英霊を思う時、尊い人生の一コマを振り返り、残り少ない我が身を血涙して嗚呼断腸の思いで、ただ合掌あるのみです。

部隊は昭和十九年七月二十日、通称「傳第三三七三部隊」の連隊砲中隊佐竹隊と呼称する。十月三日加美郡色麻村王城寺原廠舎に移駐、三カ月交代での屯営勤務に入り演習に参加しました。十一

月一日には新潟県北蒲原郡笹村大日原演習場において歩砲連合秋季の大演習に参加、同十一月末には桃生郡野蒜海岸にて米軍上陸用舟艇迎撃作戦に参加、浅井部落に十日間民宿。十二月に入り仙台護仙部隊と歩砲連合秋季の大演習に参加、色麻村、王城原演習場廠舎より仙台歩兵第四連隊兵舎まで、途中民宿を重ねながら一週間がかりの大演習参加。十二月一日、仙台第一陸軍病院宮城野原分院教育隊に勤務する。昭和二十年二月一日、原隊の部隊は名取郡愛島村館腰山稜線高地に連隊砲台を構築、小豆島、慶雲寺民宿より通い、米軍が本土上陸に備えて築城する。

昭和二十年七月十日未明、軍都仙台にB29重爆撃機百二十二機来襲、市内の四〇パーセント被災する。八月十五日ポツダム宣言受諾により無条件降伏で武装解除終戦となる。九月十三日より十月二十一日まで仙台臨時憲兵隊第二大隊に、「治安維持の為暴動狙撃その他公安を乱す行動等を防止

するための「日本軍憲兵」なることの証明書を交付され勤務、二十一日除隊となり復員帰郷する。

五十七回目の終戦記念日、平成十四年八月十五日、全国戦没者追悼式の対象者は戦死した軍人、軍属約二百三十万人と空襲などで亡くなられた一般庶民約八十万、敗戦によりソ連シベリアに捕虜の身となり強制連行され抑留生活中酷寒零下三〇度の異国で強制労働に耐え兼ね凍土に眠る同胞約六万人……！

母は来ました今日も来た

この岸壁に今日も来た

届かぬ願いと知りながらもしや

もしやにもしやもしやに

ひかされて……「岸壁の母」より

戦陣に散り戦禍に倒れた幾多の人々に心から追悼の意を表し、今次大戦における戦争の悲惨さや戦没者の無念さ、遺族の悲しみが年次世代と共に風化しつつある昨今、残されし「生」ある我々としてはこれらの戦争体験を後世に語り継ぐ義務あ

りと思考される。不戦を誓い、往時の労苦を想起させ、将来に一切の愚かで悲惨な戦争行為を放棄するとの決意を新たにするものです。永遠の平和の礎とさせたいものです。そして日本の今日があるのは幾多の戦友及び同胞の尊い犠牲の代価である事を永久に忘れてはならないのです。

繰り返しながら先の大戦のように誠に不幸で愚かな戦争の惨状を再び繰り返さぬよう、現在の国防は自衛隊と改称しながらも自国民を守り絶対に海外派兵のない平和国家の自衛隊として存続させ、そして世界永遠の平和を後世に伝え世界との友好関係を築くよう、国民一丸となつて努力することを誓いたいものです。

【解 説】

第十九師団、山砲兵第二十五連隊、後の「杉」兵団、所謂「羅南男児」と言われた強兵の部隊である。

軍隊での勤務生活中、九死に一生を得た経験が

五回、一度は満期延期でトラック島輸送船で……

二度目は 昭和二十年八月の召集

三度目は 沖繩戦に免かれる

四度目は 仙台市のB 29爆撃の難

五度目は 北方要員で「日蓮丸」に乗船してお

れば、敵潜水艦の雷撃を免かれた

戦地での体験者は「もし、あの時、……であつたなら戦死していたであろう」という体験を持つたであろう。

軍隊では命令は絶対的なものである。「上官の命は天皇の命令である」と教育されていた。

軍隊での教育は、所謂、「典・範・令」によりなされるもので、典とは「歩兵操典」等、範とは「射撃教典」等、令とは「作戦要務令」等である。その作戦要務令の綱領の第一に、

「軍ノ主トスル所ハ戦闘ナリ、故ニ百事皆戦闘ヲ以テ基準トスヘシ而シテ戦闘一般ノ目的ハ敵ヲ圧倒殲滅シテ迅速ニ戦捷ヲ獲得スルニ在リ。

第四 軍紀ハ軍隊ノ命脈ナリ戦場到场ル処境遇ヲ

異ニシ且諸種ノ任務ヲ有スル全軍ヲシテ上将帥ヨリ下一兵ニ至ル迄脈絡一貫克ク一定ノ方針ニ従ヒ衆心一致ノ行動ニ就カシメ得ルモノ即チ軍紀ニシテ其ノ弛張ハ実ニ軍ノ運命ヲ左右スルモノナリ而シテ軍紀ノ要素ハ服従ニ在リ故ニ全軍ノ將兵ヲシテ身命ヲ君国ニ献ケ至誠上長ニ服従シ其ノ命令ヲ確守スルヲ以テ第二ノ天性ト成サシムルヲ要ス」と。

このように命令の確守、上長に服従の軍紀は軍隊の命脈である。従って、軍隊に於いては命令に絶対服従である。

従って、命令を拒否することはできない。その命令が死を予期するものであっても、拒否はできない。現在会社の規正、ルールでは考えられないであろう。従って体験者「清和田氏」は、その命を拒否ではなく、その命令、運命から免れたのである。

軍隊に入って、初年兵の時から、感ずることは「軍隊とは運隊であった」ということであろう。

運は、自ら選ぶことができぬ、まさに運命である。戦地に行き、生きて還った者は、多かれ、少なかれ運命によって帰還できたと実感しているのである。

例えば、米潜水艦「タウトグ号」は魚雷を前部に七発、計十四発搭載して我が船団の来るのをキャッチし待ち構えていた。そして、敵潜のレーダー網に捕捉されたのが、午後六時四十分、魚雷発射は八時二十一分、阿鼻叫喚が嘘のように静寂に戻ったのは午後九時頃で、その時は「日蓮丸」「白雲」は海底に消えたという。

この事実は秘匿され、戦死を知らない遺族が多数おられるという。まさに運不運の別れ目である。その中には羅南部隊満期除隊者も含まれていた。

従軍中の食物散見

京都府 矢野 美三雄

私は昭和十七（一九四二）年二月二十五日、故国を立ち、従軍期間約四年八カ月間、海軍の後方支援の兵站部経理事務であったが、いかに補給が大切であるかを痛感した。大国の米国は食糧の確保が勝利の第一条件であることを充分認識していた。日本の敗戦の一大要因は食をおろそかにしたからであると思う。

日本は日清・日露の大戦には食は現地で徴発した。即ち略奪という野蛮な悪業が公然と行われていたのである。およそ戦争で聖戦という美名で殺人行為が行われてよいであろうか。残虐な非人情的戦闘は断じて許されない。勤皇佐幕の動乱の時期を経て明治維新の大業となった。日本も先進国並に軍備を持ち建軍がなされたのである。古語に